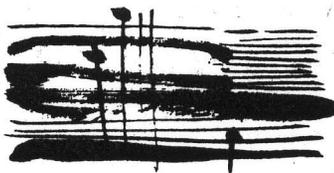


展 望



山元 眞

みんなが集まる教会

「この教会は、来年、創立五十周年を迎える。どのような教会づくりをすればいいのか、どのような教会であればいいのか。これを機会に考えることにした。年間のスローガンを掲げた。「みんなの教会」バリアフリーの教会づくりを目指して」。

このスローガンは二年続いている。この機会に一番考えなければならぬことは何か。それは、集まって祝うことである。教会は神によって呼び集められた共同体であるとするなら、まず、集まるのが最優先される

教会はつくられていく

なければならぬ。さまざまな事情で教会に来れない人たちがいる。毎週は無理でも、来られる時に自由に、安心して来られる教会。そんな教会であつたらいい。そのような思いでこのスローガンが決められた。

「教会づくり」という言葉があるが、教会は人がつくるのではない。神がつくつてくださったものだから、というので

気がついてきた。そのためには、まず、

共同体はつくられていくもの

いいよつに変えてくださる。わたしたちの考えではなく、神のシナリオに従って変えられていくのである。その結果は喜びであり、平和、希望である。この教会は目に見えて変わっている。力みはない。変えなければ、という意気込みも今はない。

「自然に、一人ひとりが喜びに満たされていく。その過程で人々は神の計りに気付き、信じる喜びが少しずつ増していく。」

何が変わったか

主日のミサ参加者が増えている。聖堂が狭く感じられる。ミサ後、教会の庭で談笑する姿が見えるようになった。子どもたちは明るく、遊び回る。ミサ中の沈黙が深い。歌声が響く。典礼のよさが分かってきた。聖なる三日間の典礼参加者が増えた。復活徹夜祭では、すべての朗読が読まれ、詩編は朗唱された。二時間半を要した典礼にもかかわらず、

子どもたちの真剣な態度、侍者の姿に大人たちは感心した。青年たちが活動を始めた。月一度の子ども共になさげのミサの奉仕のために他の教会からも若者が集まるよつになった。その前夜は狭い教会に五、六人の若者が泊まるよつになった。陰になり、日なたになつて奉仕する信者が増えてきた。聖堂に木製のベンチが寄付された。誰が寄付したのかいまだに分かっていない。高齢者の奉仕グループが

温かい共同体

る。委員は名譽職ではない。集う場所を求めるよつになった。折から、教会の隣接地が売りに出された。今、信徒はその土地の購入を計画している。教会維持費の納入世帯が増えた。このことは、信徒が教会に戻り、神に感謝をささげている印ではなからうか。これらの変化は、すべて聖霊の働きによるものであつた。

生まれた。信者でない人が教会に来るよつになった。ステンドグラスのためにと寄付があり、スペインで活躍する地元のアパレル作家が無償で作成してくれるよつになった。教会委員会の性格が変わつた。司祭と委員中心に動いていた教会が、信徒中心の教会に変わりつつある。信徒の思いが反映されるよつになった。教会委員会は上意下達の機関ではなく、むしろ信徒の思いを吸い上げる機関ではないだろうか。その活動精神はイエスが示してくださった奉仕の精神であ

教会は温かくなければならぬ。安心できる場であればならない。義務感にさいなまれ、罪の意識に打ちひしがれて頭を下げ、うつむいて生きる場ではない。神の福音に触れ、癒やされたことを実感し、喜びに満たされていなければならない。五十年間は一つの区切り。このような大きな区切りもまた、神からの恵みである。このような機会を通して人は神の恵みの偉大さを体験する。ちなみに、式典を準備する実行委員会は、まだ生まれていない。今はただ、一人でも多くの人喜んで集える教会を求めて歩んでいる。

(福岡教区司祭)